お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第 5 巻

連携を軸に保育の要点を探る

―保育カンファレンスを通して考える―

平成 12 年度

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

はじめに

園長　片岡康子

「保育の研究」第５巻の刊行を迎えるはこびとなりました。

本年度の研究テーマは「連携を軸に保育の要点を考える」です。「連携」をテーマにした研究は第３巻に続いて２回目となりますが、連携をテーマにしたこれまでの研究を通して保育者同志の相互理解が進み、保育に対する共通認識が深まり、保育が充実してきたと実感できることは何よりの成果と受けとめております。

保育者が、子ども一人ひとりの活動場面に応じて、いかにすればその活動を豊かにする役割を果たすことができるのか、いかにして一人ひとりの子どもとしっかり向き合い、触れ合い、育むのか、ということが保育の核になります。その核を充実するために、保育者はいかなる連携をはからなければならないのでしょうか。

教育を密室化して他者に閉ざしてしまうのではなく、公開し、他者との連携を求めていく教育者の姿勢は21世紀にはさらに必要となります。総合的な学習に象徴されるように知の統合の実現に向けて、一人ひとりの教師が個性的な光を放ちながら虹のような統合体として輝く連携が求められるのです。

本紀要には、「一人一人に即した保育を通して、子どもたちの自主性・主体性を育てる」ことに向けて、「一人一人の教師はいかに対応し、いかに連携していくべきか」を語り合いその方策を求める保育者の率直な姿が描きだされています。経験をもとに紡ぎだされた考察の言葉は現場に立つ多くの方々の共感を呼ぶことでしょう。

本紀要に関するご意見・ご質問をご遠慮なく頂き、今後とも情報交流を通して共に未来を展望することができましたならば、それに勝る喜びはございません。

目　　次

はじめに…… 3

Ⅰ．研究の内容…… 5

1．本年度の研究について…… 5

2．連携を軸に保育の要点を探る…… 7
——保育カンファレンスを通して考える——

3．1999年４月28日の実践記録
［1］フリーの保育者の記録…… 16
［2］担任の記録…… 20
［3］前担任の記録…… 21
［4］記録［1］～［3］をまとめたもの…… 24

4．カンファレンスの概要
［1］1999年６月16日のカンファレンスの概要…… 33
［2］1999年９月14日のカンファレンスの概要…… 48
［3］1999年９月27日のカンファレンスの概要…… 70

5．カンファレンスを通して見えてきたもの…… 78
（４月28日の事例に沿って）

Ⅱ．各実践者の立場から…… 80

あとがき…… 90

Ⅰ．研 究 の 内 容

1．本年度の研究について

桝 田 正 子

今年度の初めわれわれは、「保育における連携」を研究テーマに掲げて保育カンファレンスに臨んだ。次章の本論に述べているように、「連携」はこれまでに一度取り上げたテーマ（平成10年度、保育の研究 第３巻）ではあるが、カンファレンスの地道な継続によって保育者同士がますますスムーズに連携体制が取れるようになってきていることや、幼稚園全体の子どもたちの生活が前にも増して充実してきたように感じられること等から、再度研究の視点とすることの意義を感じたからである。さらに、ティームティーチングということが様々なところで論議に上り、実施され始めてもいる昨今、保育者間の連携を深めるための要因や、逆に連携を取りにくくする問題点等が見えてくるとすれば、それを明確にして発信するのも時宜にかなったことであろうという思いもあった。

しかし本年度のカンファレンスの実際は、次章に詳述の通り、当初の思いをさらに超えて展開したといえるものであった。すなわち、各回のカンファレンスにおける話題は、視点を「連携」に置きながらも単に連携を進めるための技術的なことではなく、常に、保育実践における価値の認識や判断の基準、またはそれぞれの保育観や子どもの捉え等に及ぶものであり、保育の本質にかかわるものとなっていたからである。本研究の主題を「連携を軸に保育の要点を探る」としたのも、この経緯によるものである。このような本研究の経過は、「我々は連携をめざして動いているわけではなく、それぞれが常に、子どもにとって最もよい保育をめざしているのだ」という各保育者の当然ともいえる基本的姿勢が、カンファレンスによって浮かび上がったといえるものであり、また、それぞれの保育者が、自分の言葉で保育実践の理念となるものを探ろうとして、主体的にまた意欲的にカンファレンスに関わっている状況と見ることもできる。保育者の認識の枠組み等が話題として深められていくカンファレンスのプロセスが保育実践研究として位置づけられることは、すでに本紀要の第1巻で検証したところであるが（第1巻　P.18～19参照）、本園で継続してきたカンファレンスが実践研究として根づいていることを、改めて確認することともなった。

また本年度の研究の特徴として挙げられることのひとつは、カンファレンスの方法に工夫を加え、数回の話し合いの逐語記録をさらにその後のカンファレンスの資料として生かしたことである。結果的に話し合いの内容が焦点化されて深められることとなり、メンバ

あとがき

伊集院　理　子

「保育者同士が、その時の自分の問題意識を出し合い、本音で語りあう機会を作り、素直に話し合う中から、保育者としての自分や自分の保育の特徴が見えてきて、保育を変えたり、保育者としての自分を調整していかれるようになる」という研究主任の深い信念に支えられながら、我々のカンファレンスは進められてきた。そしてそのカンファレンスの成果を「保育の研究」という形でまとめてきており、今回がその５巻目となる。

今回の研究の特徴的なことの一つは、年度の初めから「保育者の連携」ということにテーマを絞ってカンファレンスが始められたことにある。もう一つは、同じ事例について、時間を置いて三回のカンファレンスを積み重ねてきたことにある。その中で、話し合いの内容が、回を重ねる毎に、連携をしていく上での要点ということから、連携の枠を超え、私たちが日々の保育の中で大事にしている保育の本質に迫るものに昇華していった。言葉でまとめてしまえば、ありきたりの内容かもしれないが、一つの事例についての話し合いやそれをまとめる作業を積み重ねる中で自然な収束としてその内容が引き出されてきたことがとても意味のあることであった。

どういう事に結びついていくのか分からないまま話し合いを重ねていくことは、簡単のようでとても難しいことである。永らく研究を引っ張ってくれてきた田中先生が職場を去られ、その後を引き継いで中心になって研究を進める立場に立って、その難しさを初めて身にしみて感じた。先が見えない話し合いは、何も生み出していないのではないかという不安がついてまわり、結論が出るほど深まっていないのに何かまとめにつなげていかないといけないのではないかという思いがどうしても頭を擡げてくる。研究主任としてのプレッシャーを抱えながら、田中先生が冒頭に書いた思いから、園内研究として保育カンファレンスを推進し、その中で一貫して、保育者としての生身の感覚を尊重して当事者が感じている主観の世界そのものを参加者全員で読み解こうとする姿勢を保ち続け、早急に何らかの理論、結論を導き出すのではなく、その中で見えてきたことを自分たちの保育としてまとめていくことを粘り強く追求してこられたことに、今さらながら深く敬意を表さずにはいられない。

今回の研究で、保育者の連携ということを切り口にして浮かび上がってきた保育の要点は、丁寧にやりとりを重ねて行く、相手の思いに真摯に向き合う、主体的にその人らしく関わるなど、人と人が関わり合いながらお互いを尊重して生活していくうえでの要点にも重なっている。大人の社会も子どもの社会も、人と人が向き合って関わり合いながら生活して行くことがとても難しくなっている。保育の中での保育者同士の関わり、子ども同士の関わり、子どもと保育者の関わりを細かく探って行くことの中から、今の保育に求められている要点を粘り強くさらに追求していきたいと思っている。

研　究　同　人

園　　長	片　岡　康　子
副　園　長	桝　田　正　子
	田　中　三保子
	吉　岡　晶　子
	伊集院　理　子
	上坂元　絵　里
	髙　橋　陽　子
	尾　形　節　子
	清　宮　総　子
本学教官	田　代　和　美

お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第５巻

平成12年12月20日発行

発　行　お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL. 03－5978－5881
FAX. 03－5978－5882

印　刷　田畑謄写堂
〒112-0012 東京都文京区大塚3-6-6-201
TEL. 03－3941－1329